

現代の民話

戦争ってなあに

びんたあめあられ

水谷章三文 ■ 長尾みのる絵



NDC 913

水谷章三

びんた あめ あられ

国土社 1985

102p 22cm (現代の民話・戦争ってなあに 4)

現代の民話・戦争ってなあに—— 4

びんた あめ あられ

みすたにしうぞう 水谷章三・文 なかお 長尾みのる・絵

1985年6月20日 初版印刷

1985年6月25日 初版発行

■発行所 株式会社**国 土 社**

■発行者 長宗泰造

●112 東京都文京区目白台1-17-6

電話 03(943)3721(代)

振替 東京6-90631

©1985 Shozo Mizutani & Minoru Nagao

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

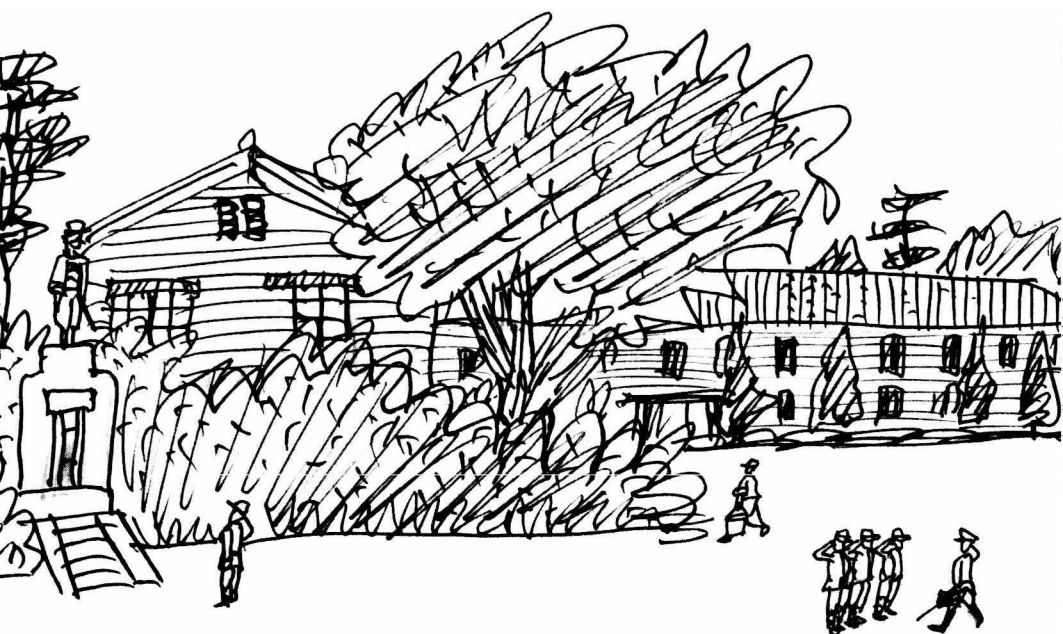
ISBN4-337-07104-0 C8391

びんたあめあられ

水谷章三文 長尾みのる絵







あとがき	関 ^{せき}	判 ^{はん}	とう	優 ^{ゆう}	び	もくじ
	取 ^と	こ	うち	等 ^{とう}	ん	
	り	屋 ^や	ゃん	生 ^{せい}	た	

100

83 55 37 23 5

装丁 小川公男

び
ん
た



軍隊^{ぐんたい}つてところは、子どものころから夢^{ゆめ}にみていたようなものじゃあなかつたね。

昭和十四年の春だ。おれが軍隊^{ぐんたい}にひっぱられたのは。

はじめのうちは、まず、びんたびんたのまいにちだった。びんたのあいまに、食^たつたり寝^ねたり、訓練^{くんれん}したりしているようなもんだった。

このおれも、どれほどびんたをくらったことか。わすれられないのは、はじめのあのびんただ。

十日にいちどか半月にいちど、きまって内務検査^{ないむけんさ}というのがあってね。つまり、兵隊^{へいたい}の持ち物検査^{もつけんさ}だ。きようは内務検査^{ないむけんさ}があるとなると、そりゃあおおさわぎだ。

兵舎^{へいしゃ}の部屋^{へや}のおおそうじから武器^{ぶき}の手いれ、じぶんじぶんの持ち物^{もつ}をせ



んたくしたりみがいたり、なにからなにまでぴかぴかにして、かずをびったりそろえて、検査官殿におみせしなくてはならない。

軍隊での持ち物は、武器はもちろん、軍服から下着、くつした、糸針のはてまでが、すべて天皇陛下がくだしたまわれた物であり、おれたち兵隊の命よりたいせつなんだ。ほんとだよ。

そのとき、たとえくつしたがかたいっぽうなくなっても、

「きさまあつ、たるんどるうっ！」

というわけで、往復びんたがとぶ。

シャベルみたいな手で、バシーツとくる。

そのたびに、軍人精神ってやつをたたきこまれるわけだ。

さて、その日だが。

午前中のはげしい訓練がおわると、午後ははじめての内務検査だという
んで、おれたち新兵は兵舎へとんで帰った。

なくなった物を血まなこでさがす者、よごれた下着のせんたくをはじめ
る者、くつみがきをはじめる者。兵舎の中は、ハチの巣をつつついたよう
なさわぎだ。

おれも、毛布のえり布をとりかえて、よごれたのをせんたくした。それ
を物干所、物ほし場のことを軍隊ではそんなふうにいってたな。その物干
所にもって行って、つなにぶらさげた。

いまじゃあバレーコートがいくつもできようというくらい、ひろい物干
所は、まるで、でかいせんたく工場の乾燥場といったところだ。いろんな
物が、うわあっとならべてほしてある。

*新兵＝新しく入営した兵

そのすきまをみつけて、えり布をぶらさげていたときだ。

「おい。」

と、うしろから声をかけられた。

ふりむいたら、なんと、おれの班の副班長殿ではないか。

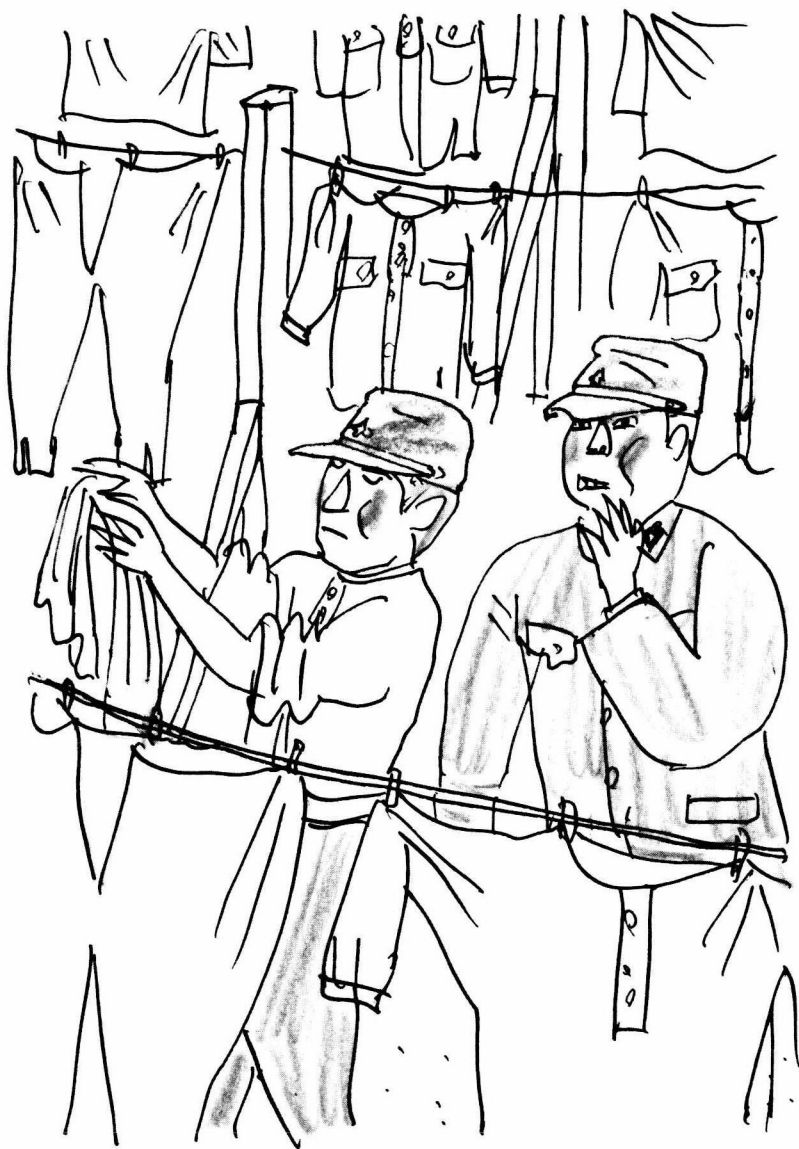
泣く子もだまる鬼の上等兵。連隊で知らない者はいない。新兵しごきでは名のきこえた人物だ。

おれは、せんとく物のあいだにはさまって、からだを棒みたいにつっぱらかして敬礼をした。

「はいっ、なんでありますかつ。」

「こら、でかい声を出すな。」

上等兵殿は、あたりに人がいないのをたしかめてから、おれの耳に口を



よせた。

「じつはな、おれの袴下こしたがいつちようなくなつた。きさま、買数いんずうあわせに手をかしてくれんか。」

袴下こしたとは、ズボン下のこと。それは、わかったが、買数いんずうあわせというのがわからない。

「買数いんずうあわせとは、なんでありますか。」

こんどは、声をひそめて質問しつもんした。

「ちよろまかすんだ。だれのもかまわん、おれに合いそうなのをみつけたら、さつと持もつてきちまえ。いいかつ。」

「なまえ書いてあるでありますが……。」

「いらんことをいうでないつ。」

「はっ。」

といつて、敬礼はしたものの、おれは、ちよつとこまつたね。

こまるわけだよ。ひとのものをぬすんでこいっていう命令なんだから。すると、上等兵殿がにたつと笑つて、

「おぼえとけ。きさまもなにか紛失したら、いまいったような調子で、とにかく員数を合わせるんだ。ぬすまれたやつは、また、だれかのをやる。そのくりかえしき。最後にぬすまれたやつは運がわるかったとあきらめる。おつと、時間がないぞ。おい、うまくやれ。」

おれにこそどろの才能があるのにらんだわけでもないだろうが、上等兵殿は、そういう残して姿をけした。

軍隊では、上官の命令には絶対服従だ。いやとはいえない。それに、す

ぐにも内務検査がはじまる。

袴下はすぐみつかった。

だれのだろうとかまうもんか。まだなまがわきのやつを、さっとつなからはずして、まるめてポケットにおしこんだ。

どきどきしながら部屋にすべりこむと、上等兵殿が、こっちを見ないふりして背中に手をまわした。なんとかだれにもしられないように戦利品を手わたすことができた。

ところが、その日の内務検査では、所持品の員数の合わない初年兵が六人いた。なんと、おれもその中のひとりだった。

検査のとちゅうで、物干所にほしてあるものも持ってこいといわれて、おれは走った。けど、たしかにほしたはずのその場所から、おれの毛布の

